

序文

筆者は2013年7月1日に日本歯科医学会会長に就任し、2025年6月30日で退任した。

日本歯科医学会は2013年4月1日以来、公益社団法人日本歯科医師会の内部組織として存在し、現時点では専門分科会25団体、認定分科会21団体で構成されている。もちろん学会の事業計画は独自に立てられている。

会長に就任してすぐに臨時委員会の1つとして重点研究委員会を立ち上げ、この臨時委員会に諮問書の形で事業の依頼を行った。少し長くなるがその諮問書の内容を以下に紹介する。

「日本歯科医師会は8020運動を開始して以来、高齢者の口腔のケアに関して積極的な活動を行って効果を上げている一方で、乳児・小児における摂食機能障害が大きな社会問題になっている。いわゆる障がいをもっている子どもたちの摂食機能障害のみならず、今日の生活環境に起因しているといわれるが健常児においても問題化してきている。しかしながら、その実態を示す明確なデータを本学会が持っていなかったために本委員会において、集学的な研究結果から提示していただきたい。これは公募型ではなく本執行部が主体性をもって行う研究であり、得られた成果を学会として社会に公表し、関連多職種との連携の下に歯科医学的見地から、摂食機能障害で困っている子どもたちへのサポートを積極的に行おうとするものである。」(原文まま)

なぜこのような諮問を就任直後から行ったのかといえば、実はこれに先立つこと約半年、それまで学部長として就任していた日本歯科大学生命歯学部附属病院機能として「日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック」が2012年10月16日に開院したことに起因している。

開院後4か月目に、院長の菊谷 武先生と、障がいの摂食機能障害(摂食嚥下障害)を専門に行っていた本書編集委員の田村文彦先生が揃って患者さんの受診状況の報告に来られた。そこには、来院された患者

さんの状況が細かく示されていた。高齢歯科患者さんの来院を意識していた筆者にとって、同クリニックの受診者のうち12歳以下がおよそ25%も占めていることは大きな驚きであった。さらに、こうした受診者は、障がいをもつ小児患者さんだけではないという。公的機関などに掲載された同クリニックの開院案内から、食べることで困っている子どもを持つ保護者が、「どこにも相談をもっていきようがない、障がいでも病気でもないように思われるわが子の食生活について、ここならば相談なりアドバイスなりに応じてもらえるのでは」という、子どもを育てるうえで実は非常に切実な悩みを抱えて来られるケースが多いとのことであった。当時はまさに相談であり、医療の体系で対応することもできず、悩むところであった。

筆者はその半年後には大学を退職して学会会長に専念することに決まっていたのだが、事業の設立責任者として同クリニックの動向は気がかりであった。そこで学会会長就任直後に、上記諮問書の内容で重点研究委員会をスタートさせたのである。

設立当初は何から進めていけばよいかも決まらず委員の方々にはご苦労をおかけしたが、約2年の調査分析結果を「子どもの食の問題に関する調査」の報告書としてまとめていただくことができた。そこからは積極的な展開を遂げ、2018年の公的医療保険改定において新病名導入への道が開かれたのである。新病名の「口腔機能発達不全症」はもちろんのこと、子どもの発達機能改善を目指すハビリテーションから着想して通称名を「ハビル」とし、連携する一般社団法人日本歯科医学会連合において商標登録することもできた。現在では新病名、通称名ともに社会に広く知られることとなり、摂食障害／摂食機能障害に悩む子どもたちとその保護者たちのために多職種と連携した事業が進展している。

この事業は、少子化時代に、歯科医療を通じた社会への大きな貢献と捉えている。

日本歯科医学会前会長 住友雅人

改訂にあたって

保険診療としての口腔機能発達不全症が2018年に誕生し、今年で早くも8年が経ちました。2年に1回行われる診療報酬改定のたびに、口腔機能発達不全症の管理指導の内容も成長が続いています。本書の第一版が発行されたのは1年前ですが、今般、令和8年度の診療報酬改定に合わせて第2版を上梓することとなりました。

初版でも書きましたが、「食べる」ことにより、栄養を摂取して健康な体を作る、味や風味を楽しむ、見た目を楽しむ、咀嚼や嚥下を楽しむ、誰かと一緒に食べることでコミュニケーションを楽しむ、一人で食べることで自分の自由を楽しむ、素敵なレストランに行ってその場所を楽しむ、旅行先で名物を楽しんで素敵な思い出になるなど、身体発育だけではなく、さまざまな喜びが生み出されます。それだけに、親は子どもの口腔の健康を願い、関心も高くなります。そして子ども自身は成長していく過程で口腔機能の困りごとやつらさを自覚し、親とは違う感じ方でそれらの問題に自ら立ち向かっていくことになります。私たち歯科医療関係者は口腔の専門家として、人生の基盤を作る小児期の口腔機能発達を促進し支えることで、子どもたちと家族の生活を支えるお手伝いができるかもしれません。

本書では初版に続き、口腔機能発達不全症の成り立ちから最新の保険対応、問題点の解釈や評価、そして多職種連携等、具体的な事例を提示し、臨床に役立つ内容で構成されています。口腔機能発達不全症の管理指導は、子どもと家族を支える医療です。検査や訓練だけにフォーカスするのではなく、生活全体を支えていける管理指導を行えるよう、本書をご活用いただければ幸いです。

日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 教授・科長 田村文誉